

「手紙が届いてるわよ」

母にそう言われて渡されたのは、何の変哲もない、一通の白い封筒。

少しの疑問と少しの興味を内に孕ませた状態で開き、中に封入されていた手紙の文を確認する。

記されていたのは、御伽話のような作り物語。

しかし、私のような〈精神が成熟せぬまま、身体だけが大きくなつた〉人間を動かすには、十分な燃料になりえたのです。

挾啓、  
汚れなき君へ

「此処が、時空研究所」

日差しは厳しいが、青と白の二色編成の空が爽やかな、そんな午後一時。手紙に書かれていた場所を、私は訪れていた。

（見た目はただの廃工場だけど…本当に此処で手紙に書かれている〈奇跡のような出来事〉が起きるのかな？）

疑問を胸に抱きつつ、無意識に扉をノックをして開いていた。

外見とは裏腹に、入つてすぐ目に入つたのは一般的な事務室の光景だつた。其処にいたのは、二十代から三十代あたりの男性三人と女性二人。そのうちの一人で、眼鏡をかけた女性が、建物のギヤップに驚きを隠せぬ私にいち早く気づいた。

「すみません。ここ、関係者以外立ち入り禁止でして」

「あ、あの…これが自宅に届いたので、此方に訪れた者です」

女性の真っ直ぐな視線に怯えつつ、私は例の手紙を彼女に差し出した。彼女が中身を確認すると、目を大きく見開いた。

「おっ、お客様でしたか！これは失礼。この時空研究所に来る人の大抵は、招待状を持たず、興味本位で覗きに来る者なので」

「い、いえいえ。大丈夫です。慣れますので」

「本当に、申し訳ないです。今すぐ説明の準備に取りかかりますので、こちらの部屋で、少々お待ちくださいな」

そう言われ、私は応接室で待機した。椅子に腰掛け、音のない空間のある一点を見つめていた私だが、その心の内には何もなかつた。いや、何かはあったのかもしれない。疑いとか不安とか、そういう類いの感情は。しかしながら、私には感じ取ることが出来なかつたのだ。自分に疎いからか、そもそも自分に興味がないからか。

何分か経つて、ガチャというドアの開く音がした。私は、一瞬にして音の鳴る方へ体を向けた。眼球が捕らえた景色には、ノートパソコンを持した細身の男性と、彼とは対照的にがつしりした体格の男性と、先程とは別の小柄な女性がいた。男性二人はパソコンをプロジェクターに繋げたりスクリーンを組み立てたり、何かの準備に取りかかり、残つた女性は、私の真向かいのソファーアーに座つた。

「私、時空研究所の一員で八雲楓といいます。貴方の名と職業を教えてください」

「え、えっと…岸田愛実きしだあみと申します。○○大学の学生です」

「では、貴方が此処に来た経緯を教えてください」

「確かに、二週間前やくもかうじ…だつたと思ひます。家に、手紙が届いたのです。『厳選なる抽選の果てに、貴方は時間旅行の権利を得ました』。こういった主旨が、そこに書かれていました。私は、知りたかったのです。本当に、そんなことが出来るのか。そして、出来るなら、一度で

いいからやつてみたい、とも思いました。こういう訳で、私は時空研究所に訪れたのです

「…良いでしょ。権利を与えた人だというのが、ちゃんと分かりましたので。音葉さ

おとは

ん、スライドよろしく。神代さん、電気消して」

彼女がそう言うと、細身の彼はパソコンの前で待機し、がつしりした彼はドア近くにあるスイッチを押した。真っ暗になつた部屋でスクリーンに映されたのは、『時空研究所の時間旅行について』と題のついた画面であつた。

八雲さんがプレゼンテーション風に行つた説明を、簡潔にまとめるとしたら、以下のようになる。

この施設には、〈時空転送装置〉：俗に言う、タイムマシンがあつて、それを使用する」とで、百年先の未来でも千年前の過去でも移動できるそうだ。この夢のような時空転送装置による時間旅行には、少しばかり規律がある。時間旅行の期間は、最長でも三日。それを過ぎると、二度と元の時間軸には戻れないらしい。また、過去に戻る場合、歴史を改变するような行い（未来の出来事を教える等々）は絶対禁止。現在に戻る方法は、旅行前に手渡される透明な石に秘密の呪文を唱えることだそうだ。

色々と非現実のように思えるのだが、彼女曰く、招待状を受け取つた人間の三割は時間旅行を経験しているとのこと。さらに、この研究所に所属している人間も、数人ではあるが、別の時間軸へ赴いたらしい。

「私からの説明は、以上で終わりです。後は、この書類に必要な項目を記入して頂ければ、すぐに出発することが出来ます」

人工の明かりが再び空間を包む。目の前に置かれた紙には、規律を破つた場合に生じる身の危険は保障しない、此處で行われた事の内容は外に漏らさない、等の約束事が書かれていた。私は、一言一句見落とさぬように注意して読み、必要な箇所にサインを施した。

「では、時間旅行の準備に取りかかせて頂きます。音葉さんは、岸田さんを『あの部屋』へ連れて行つてください。神代さんは部屋の片付けをお願いします。わたしは、舞まいさんに契約書を渡します」

一通り書面を見てから、彼女はそそくさと立ち去つた。これから、一体何が始まるというのか。内心わくわくしていると、音葉と呼ばれた彼が、私に「岸田さん、僕についてきてください」と声をかけた。

「岸田さんは、未来に行きたいの？それとも過去？」

応接室を出て、すぐのこと。前を歩く男性に質問された。

「過去、ですかね…十年前くらい前の」

「なんだ！何で過去なの？僕なら、迷わず未来を選択するけど」

「自分は、未来がどうなっているかより、自分が何故このような人間なったのかを知る方に

興味がある人間でして…だからです」

「へ、へえ…こんな偶然あるんだ」

「偶然？」

「ああ、いきなりそんな事言われても分からぬよな」

ハハハと笑いながら、彼は言葉を繋げた。

「ほら、さつき部屋にずつしりとした男の人いたでしょ？神代智樹ともきって言うんだけど、彼も君と似た理由で過去に行つたんだ。まあ、彼はテスト段階の時に時間旅行を味わつたんだけど。自分の何処が駄目だったのか、それを確かめるために過去に行く…って言つてたかな」

「はあ」

「あ、くだらないこと話してる間についた！ほら、入つてきて」

歩く事数分。『関係者以外立入禁止』と赤く書かれたドアの奥へと導かれた。入つてすぐともきに見えたのは、五メートル程はある大がかりな機械と、それを制御している一人の男性だ。恐らく、この機会が時空転送装置なのだろう。

「さて、過去に戻る前に、君にこれを渡しておかないとな」

そう言つて与えられたのは、小さな石の首飾りだつた。

「現実に帰つてくる際に必要になる鍵だよ。これに『リコール・フロム・プレゼント』って何度か唱えたら戻れるからね。いい？」

「はい、分かりました」

受け取つた首飾りをしつかりと握りしめ、私は機械の中間にあたる部分に入り、横になつた。

「小倉くん。後は頼んだよ」

「了解でーす。音葉先輩」

外から聞こえる声に耳を澄ましながら、期待と不安で胸を膨らましていると、突然睡魔に襲われた。次に目を覚ました時、私はこの時代にいないのだろう。

——三日間だけ、さようなら。

これが、意識を闇に葬る前に思い浮かんだ、最後の言葉であつた

何時の日か、私は生きていながら夢を見ていた。

誰でも平等に愛を振り分け、誰からも愛される人になつた自分を。

両親の「愛が実るよう」 という願いを叶えた自分を。

しかしながら、その夢は夢でしかなかつた。

現状を振り返つたら、私が愛されたのは、精々家族ぐらいで。

友達が沢山いたと自信を持って言えるのは、小学生前半の頃だけ。

あの頃の自分に、伝えなければいけないものがある。

——後悔の波に呑まれ、何もかもが消えてしまう前に。

次に目を覚ました時、私は自宅から近い図書館前にあるベンチで横になっていた。

（あれ、何でこんな所にいるんだろう）

半分寝た状態の脳で必死に考える。私は透明な石を渡されて、大がかりな機械に入れられた。現段階で、石の首飾りはブレスレットのようにして右手首に巻いてある。となると、私は無事にタイムスリップしたということになる。

しかし、にわかに信じがたいのだ。小さい頃、家族と一緒に見た映画で見たような、異空間を行き交う感覚はなく、長時間夢を見ている感覚に近いものがあつたから。果たして、私は本当に過去に戻ったのか。

（：その不安は、周辺を散歩することで払拭されることになる。

外に出て徒步一分。到着したのは、三年前に潰れた駄菓子屋。確かに、店主のお婆さんが亡くなつたことを受けて閉店したのだが、死んだはずの彼女が呑気に店番をしている。

それだけではない。今はスーパー・マーケットになつてゐる場所に、ジムが建設されていたり、年季の入つたビルの取り壊し作業が始まつていたりと、現在の時間軸ではあり得ない光景が広がつていた。

（：間違いない、本当に戻ってきたんだ）

そう思いつつ、念のために図書館へ戻つて新聞に目を通した。十年前のものが最新号として置かれていた。

まさか、本当に時間旅行が出来るとは。内から湧いてくる喜びを必死に抑えつつ、私は暇つぶしとして、寄贈されていた当時の新刊小説を読んだ。勿論、今は時代の陰に埋もれて姿を見せなくなつたものを。

（『四六時中探しの終着点。其処にあつたのは、自分の醜い心だけ』。良いなあ、良い言葉なのに何故今は：つて、何やつてるんだ、私。よく考えたら、本読んでる場合じやない！）

丁度、半分くらいの頁を捲つた頃だ。自分が何故此処にいるのか、その目的を思い出した私は、急いで本を元に戻し、近くの文房具店でレターセットと筆記用具を購入した。

そう、今から手紙を書くのだ。宛先は、この時代の自分。小学三年生くらいの私だ。書く内容はもう決めている。決めてはいるのだが、いざ書いてみると、思つていたより腕が進まない。まだ右も左もわからない少女に、ただ難しい言葉を並べても意味が伝わらないし、かといつて全部ひらがなで書くとなると時間が相当かかる。

（仕方ない、なるべく簡単な表現を使うか）

決心したら、その後はひたすら紙に言葉を記すだけ。私は気の赴くままに筆を執つた。

「よし、書くだけ書いた」

書いては消し、書いては消しを繰り返し、気がつけば日が沈みかけた。この図書館は珍し

いことに、二十四時間開館しているので、追い出されることははないのだが、私に与えられた時間を考慮すると、あまり悠長に構えていてはいけない気がした。数回読み直し、これで大丈夫だと思ったところで、便箋を封筒に入れ、のり付けする。

研究員に質問しなかった事で、未だに一つ胸に引っかかっているものがある。『過去を改竄する行為はしてはいけない』というのは、具体的にどういう事なのだろうか。スマートフォンを使うこと？SNSが流行るって伝えること？…前者は恐らく、規律違反に当る行為なのだろう。しかし、後者はどうだ。未来を教えていると受け取らずに、世迷い言と捉えられたら、それは過去を変えることにはならない。其処のところはどうなのかと、書きながら何度も考えた。

聞きそびれたが故に残る心の靄が、私の行動に待ったをかける。

「お前の行いで、もし現在に帰れなかつたらどうするんだ、今ならまだ間に合う、その手紙を破つて捨ててしまえ」

私の皮を被つた別の私が心に責め立てる。何時もなら彼女に負けるのだが、普段の何倍も意思を固くした私には、無意味な攻撃にしかならなかつた。

「歪なお前に何度も何度も屈してきた。臆病な私よ、今回だけはお前に負けない」

気がつけば、自宅の前で立っていた。汗に濡れた手で手紙を握りしめながら。無意識の間に、前へ前へと進んでいたのだろう。新しい酸素を取り入れようと必死に働く肺と、身体全体から湧き出る汗が、その証拠だ。

「これをポストにいれれば、私の役目は終わる…此処に来た目的は、果たされる」

『役目が終わる』という言葉が気に入らず、別の言い方にわざわざ言い直した自分が相変わらず謎なのだが、今はそんなことはどうでもいい。自分のことが謎になる事など、日常茶飯事なのだから。

「手紙の内容：誰かの戯れ言として、すぐに忘れるんだよ」

本当は本人を目の前にして言いたかった台詞なのだが、大体、こういう時間旅行系の話では、自分自身に出会う確率は著しくゼロに近い。仕方なく、君が見つめる空に言の葉を託して、手紙をポストに入れた。そして、私は朱と青の混じり合う光景に呟くのだ。

「リコール・フロム・プレゼント」

「愛実、貴方に手紙が届いてるわ！」

「はーい！」

大きな返事をして、お母さんから手紙を受け取る。誰が書いたのかは分からぬけど、きっとお友だちの雪ちゃんからだ。きっと、きっとそうだ。  
わくわくしながらも、丁寧に便せんを開ける。そして、わたしはゆっくりと中身を取り出しう、聞こえるか聞こえないか分からぬ声で手紙を読んだ。

## 拝啓、汚れなき君へ

私は、君のことを一番知つていて、一番知らない人間です。

…なぞなぞみたいだよね(笑) でも、私はそういう者なのです。

今回は、ちょっとだけ、君に伝えたいことがあって、手紙を書きました。

私は、君の名前のように、誰からも愛される人になろうと必死に努力してきました。  
積極的に声かけたり、一緒に遊んだり。友達に優しくしたり、勉強の教えあいっこしたり。  
しかし、結果的に私は誰からも愛されるどころか、あまり他人に好かれない人間になっちゃいました。

今までいっぱい努力はしたよ?でもね、皆に愛される人なんて、どこにもいなって分かっちゃったんだ。

私のことが大好きって思つてる人にやさしくして、返つてくるものが愛だとしたら。

私のことを『不細工で話したくもない』って思つてる人にやさしくしても、返つてくるのはパンチやキック。

私のことを『便利な道具』って思つてる人にやさしくしても、返つてくるのは変な笑顔。

…何で同じぐらいのやさしさを振りまいでも、返つてくるものが違うのだろう。全部同じだったら、楽なのにね。

ところで、君は大人になつたら何になりたいのかな?

花屋さん? パティシエ? 作家さん?

私は…今、夢がないんだ。君と同じぐらいの年には、沢山あつたのだけど、段々なくなつちゃつたんだ。

自分のことばかり考えているからだよ。『自分は今まで良いから、頭のいい子が集まるクラスに行きたくない』とか『自分があの学校の入学試験で落ちるのは嫌だ』とか、自分のわがままばかりを押し通していたら、いつのまにか夢なんてなくなつてたよ。おかしなお話だと思うけど、ほんとの話だからね。わがままばかり言つちゃダメだよ? たまにはお母さんや先生の言うこともしっかり聞いてね。

言いたいことはもつとあるんだけど、後一つだけ。これだけ言わせて。

私は、君のことがうらやましい。未来が希望にあふれて、目もキラキラしている君が。

そんな君に、ダメ人間の私から最後のアドバイス。

例え、どんなに嫌なことがあっても、命を捨ててはいけないよ。未来には、楽しいことがいっぱいある。この事を忘れちゃいけないよ? 分かったね? お姉さんとの約束だよ?

じゃあ、十年後にも会いましょう!



「…おい、意識を取り戻したぞ！」

「こんな奇跡的なことが起こるなんて…」

気がつくと、私は白い空間の中にいた。ベットの上で横になり、酸素マスクや沢山の管につながれた状態で。一体何が起こったのか、よくわからなかつた。

周りが少し落ち着いてから、涙が枯れるほど泣いた母の話を聞く。どうやら、私は二週間ほど前に鉄柱落下事故に巻き込まれ、意識不明の重体を負つたらしい。そして、今日。医者から「数日の間に目を覚まさなければ、一生このままなのかもしれない」と宣告されていたそうだ。

（大体分かってたけど…やっぱ夢だつたか。時間旅行なんて）

お見舞いの花束や果物が増えていく病室で、私は数日間、時間旅行の余韻に浸つっていた。ただ、それは二週間もすれば薄れていき、一ヶ月経てば大半が消えていた。

これはあくまで私の妄想なのだが、あの時、手紙を投函するのをためらっていたら、私は現世に帰つてくることが出来なかつたのだろう。臆病者の私に、本当に殺されていたのかもしれない…そう思うと怖くなつた。

死んだら死んだで楽になれたのかもしれない。未来に対する恐怖や後悔に呑まれたり、現実に殺される事がもうないから。

でも、そうであつたとしても、私はまだ死にたくない。過去に対する罪悪感で押しつぶされそうになつても、それを上回る程の楽しみを知つていて。それを堪能せずに自らの命を投げ出すのは、もつたいない。本当にもつたいないと思うのだ。

「生きてて良かつたな：人生を無駄にしなくて、本当に良かつた」

誰もいらない病室。脳に秘めていた自分の思想が、涙と共にボツリと落ちた。

現実に意識を取り戻して、二ヶ月が経過した頃のこと。めでたく退院した私は、祝日を使って、家族全員と近所の川沿いの道を散歩していた。赤と黄色の葉が織りなした道が、今まで見たのより一番綺麗だと感じる。そんな道を、時間を気にせずに歩けることが、些細ではあるが、とても嬉しいと思つた。

そのときだつた。

「さあ、やることはやつたし……」の後、どーする？」

「私はパフェ食べたいです。ほら、前に言つてた特大パフェ。あれ食べたいです」

「僕はカラオケに行きたいです。久々に歌いたいと思つたので。神代さんは？」

「俺は：そうですね、二人の意見で全然構わないのでですが、強いて言うなら、ラーメンが食べたいです」

「皆、見事なまでにバラバラや…小倉とノ助君は？」

「俺は楓さんと同意見です。甘味に飢えてるので。ノ助は？パフェ派？カラオケ派？ラーメン派？」

「お、俺は、皆さんと一緒に過ごせるだけで嬉しい人なんで…何でも良いです。本当に」「ノアちゃんみたいな事言うなあ、ノ助。じやあ、こうしよう。昼食としてラーメン食べて、カラオケで二時間ほど潰して、最後にパフェ食べる。それでいい？」

「ノ助は、舞さんの意見で大丈夫です！」

何処かで見たことのある顔と声の集団だった。そんな気がしただけなのだが、彼らの事が気になり、後ろを向いて、もっと観察しようとした。しかし、次第に「彼らを知りたい」という欲より「家族に置いていかれる」という恐怖が勝り、仕方なく前へ進んだ。

ゆつたりとした時間を過ごした後は、家に帰つて心身共に疲れをとるのみ。何もする一とが思い浮かばず、ただソファで漫然と座つていた。

まつたりとした空気に、突如、母親の声が響く。

「愛実、貴方に手紙が届いてるわよ」

「はーい」

渡されたのは、真っ白な封筒。これを見て、何故か懐かしさがこみ上げてきた。

(封を開けたら、夢のような出来事が始まる)

心の何処かで、そんな気がした。

―――)れは、不思議な夢を見た女の子の話。